

病院看護における思考の振り返りを支える ライティングツールの設計

Design of Writing Tool in Learning from Experience for Hospital Nurses

峠 貴文¹ 松田 憲幸² 田中 孝治³ 池田 満⁴

Takahumi TOGE¹, Noriyuki MATSUDA², Koji TANAKA³ and Mitsuru IKEDA⁴

¹ 和歌山大学大学院システム工学研究科

¹ Graduate course of Systems Engineering, Wakayama Graduate School

² 和歌山大学システム工学部

² Faculty of Systems Engineering, Wakayama University

³ 金沢工業大学情報フロンティア学部

³ College of Informatics and Human Communication, Kanazawa Institute of Technology

⁴ 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科

⁴ School of Knowledge Science, Japan Advanced Institute of Science and Technology

Abstract: Through learning from their experiences, hospital nurses learn how to diagnose their own thoughts. We focus on properties of hospital nurses' thinking, we provide representation of thinking to find errors against rule of the representation and design a tool for writing down their thoughts.

1. はじめに

誤りは、タスクの遂行にとって妨げだが、学習にとって理解を深める重要な契機である。病院看護師が患者・家族の価値と医療の価値の間で「答えのない問題」について考えるとき、自らの思考の誤りを自分自身で診断できることが肝要と考える。

経験した業務中の思考過程を文章に書き表すことで、自分の思考を分析させる学習法がある。たとえば、ピラミッド技法は、思考プロセスの構造を書き表すことで、思考の方法を示している [1]。しかしながら、病院看護師は、業務行動を書き表すことが習慣化しているのに比べ、思考プロセスを書き表すことには慣れていない場合が見受けられる。看護の思考を書き表す表現規約を設けることで、自らの思考の診断の訓練につながると考えられる。

看護組織で広く取り組まれているリフレクティブジャーナルは、「①なぜその場面・状況を選んだか、②何をしようとしたか、③そのときの感情はどのようなものか、④自分の判断、言動はどうであったか、⑤必要な知識や技術はどのようなことか」を繰り返しながら自らに問いかける「習慣づけ」を通して、思考力を業務プロセスの中で習得することができる [2]。看

護思考を書き表す特別の表現を持たず、自然言語による対話の上で行われている。本稿では、看護思考の訓練用の表現規約を、規約からの逸脱によって思考誤りが顕在化される思考ツールの設計を検討する。経験した思考プロセス全体を吟味する学び方や、同僚に対して自分の思考の妥当性や合理性を分かりやすく説明できると期待できる。

2. 看護思考の表現規約

病院看護師は、業務を通して重い問題を抱えるなど、悩みを深めることがある。たとえば、予想しなかった患者容態の急変や、患者との意思疎通が困難な状態のまま患者の将来を左右する看護計画の決定に関与した場合などがある。このような経験から後悔の念を日増しに増大させる。悩みが大きいほど、自分の経験を同僚に対し、分かりやすく、論理的に説明できない場合や、悲劇的な結末など一つの事実への無自覚な執着が見られる。

実体験の思考について、自ら問題点を分析し、思考法を学べるようになることを目的とした「思考訓練」のための表現規約として、次の4つのルールを設ける。訓練の後は、この表現規約を捨て、自分な

りの思考法を考えられることを期待している。

- A) 業務行動と思考行動を区別して書き表すこと。
- B) 経験の中から一つの判断を中心に論理的に書き表すこと。
- C) 判断の背後にある根源的な理由を一つ書き表すこと。
- D) 実際に起きなかった、架空のもう一つの思考を書き表すこと。

A)について、看護師が自分の業務行動だけを振り返るのではなく、思考プロセスへ関心を向けさせるため、業務行動について「記録」へ書き込み、思考行動について「思考」へ書き込みするよう区別した。

B)について、一つの看護実体験は、複雑で込み入った思考である場合が多く、このことが、思考の問題点の分析を難しくし、また、同僚への自らの思考の説明を分かりにくくしていると考えられる。できるだけ、思考を分解し、単純にさせるよう、書き表す思考では「判断」を一つに絞ることとした。一つの判断に絞って書き表すことで、思考プロセスを単純にできると考えた。

C)について、判断の背後で、自らが無自覚に絶対視した根源的な理由（これを指針と呼ぶ）を分析させることで、思考の振り返りの意義を高めることを意図した。

D)について、看護師が、自らの思考の妥当性を分かりやすく説明できるよう、二つの思考を書き表してそれぞれの指針を対比させることで、自分の思考の長所や、短所について考え説明できるようにした。

以上の表現規約を思知（しち）と呼び、思考訓練の足場として活用した。

3. 看護思考の問題点

大学病院組織の研修として思考訓練を実施し、看護師が執筆した100事例について、典型的な思知規約からの逸脱を認めた。

- (ア) 悩みがうまく言葉に表せない
- (イ) 説明の論理的な構造を精査できない
- (ウ) 判断の背後にある指針を分析できない
- (エ) 実際には起きなかった思考を想像することができない

問題点（イ）の例を示す。看護師は、高齢の入院患者の意識に混乱がみられ、自らの看取りについて、相入れない二つの希望の発言があり、最後まで本当の意志を確かめることができなかった。看取りにつ

いて、患者の希望と親族の希望とが対立した状況下で、医療従事者が看取りを決めたことに不安や後悔を抱えている。

図1はこの思考の論理構造（悟知と呼ぶ）を示す。記述の最小単位の文章をステートメントと呼ぶ。ステートメントは、通し番号、説明における役割を表すタグ、矢印はステートメント間の関係を表す。タグには、「事実」、「仮定」、「前提」、「推定」、「指針」、「判断」、「結果」がある。推定タグと判断タグ、結果タグは、その根拠となるステートメントを複数個指定する必要がある。

ステートメント1と5の事実、および、13と15の推定が、いずれのステートメントの根拠になっておらず、規約（B）への違反が認められる。この違反から、著者は、すべてのステートメントの論理構造を精査できなかった可能性が読み取れる。

ステートメント17と18の二つの指針の存在は、一つの判断に対して根源的な理由となる指針一つとした規約（C）への違反である。筆者は、自らの判断の無自覚な指針について十分な分析ができていない、あるいは、もう一つの思考の指針との対比に迷いがある可能性が読み取れる。

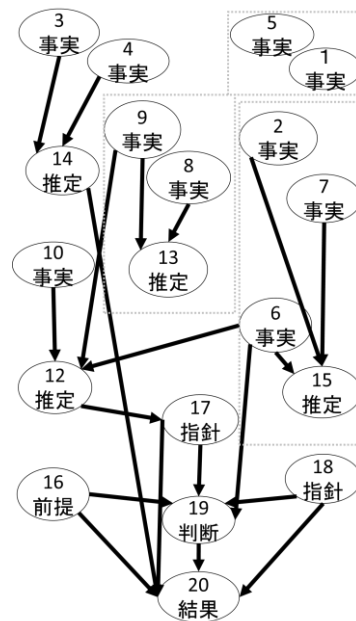


図1: 看護思考の論理構造（悟知）
（番号はステートメント番号を表す）

問題点（ウ）の例を示す。看護師は、家族の希望を優先し、予後の告知を最後までしなかった看護を振り返っている。図2は、指針と判断の記述を示す。ステートメント7の指針に「予後は告知しない」と

記述があることから、規約 (C) への違反が読み取れる。筆者は、判断と、その背後にある根源的な理由とが、少し曖昧になっている可能性があり、図2のように訂正することで、より指針を深く分析できるようになると期待できる。

誤った記述

7	指針	家族の思いと本人の「退院する」という目標を尊重し、 <u>予後は告知しない</u> 方向で統一しよう
8	判断	家族のメンタルケアをおこなうと共に、患者への症状緩和の継続とADL向上に向けた介入をおこなう

訂正した記述

6	指針	現時点での家族の思いと本人の「退院する」という目標をそのまま尊重する。
7	判断	<u>予後は告知しない</u> こととし、家族のメンタルケアをおこなうと共に、患者への症状緩和の継続とADL向上に向けた介入をおこなう

図2: 判断の背後にある指針の分析の問題点

問題点 (エ) の例を示す。看護師は、《胎児期に上半身に疾患を認め、出生後に術中死の可能性のある困難な手術を決める。母親の気丈な振る舞いを認めるも、内心は児の抱っこを熱望していると予想し、主治医へ抱っこの許可を求めるが、児の体力を奪う危険性について反論を受け、このまま抱っこを我慢させると決めた》看護について、振り返っている。

図3は、この思考の記述「思考A」、図4は、思考Aと異なる架空の思考「思考B」である。

思考A				思考Aの悟知	
No. タグ	内容	根拠	操作		
1	事実	母親は気丈に振舞っている	編集	1	
2	事実	他の母親の抱っこを見ている	編集	2	
3	推定	本心は抱っこを熱望しているかもしれない	1 2 編集	3	
4	事実	医師に抱っこの許可を求めた	編集	4	
5	指針	家族の精神面のケアしつつ児の状態の状態を優先	編集	5	
6	判断	抱っこを我慢させる	3 4 5 編集	6	
7	事実	抱っこを希望していたと知る	編集	7	
8	結果	悔やまれる	6 7 編集	8	

図3: 経験を振り返った思考Aの記述

図4のステートメント数が3個であることから、規約(D)への違反が、また、論理的な説明でないことから規約(B)への違反が認められる。著者が実際には起きなかった思考を空想できていない、すなわち、実際に起きたことへの無意識な強い執着の可能性が読み取れる。

思考B				思考Bの悟知	
No. タグ	内容	根拠	操作		
1	指針	細心の注意を払いつつ、母親の希望を尊重する	編集	1	
2	指針	母親の心理的負担を軽減させる	編集	2	
3	判断	抱っこさせる	1 2 編集	3	

図4: 思考Aと異なる架空の思考Bの記述

4. 思知ツールの画面設計

3章で示した思考の問題点、特に(イ)、(ウ)、(エ)について、執筆過程での気づきを促す、システム「思知ツール」の画面設計について検討する。(ア)については、記述できていないことは容易に顕在化できるが、文章が分かりやすいか/分かりにくいかの判断や、言葉にできない悩みをどの言葉に言い当てるべきかについては、著者以外の他者(人間)の力が不可欠であることから、今回の設計からは除外した。

思考の問題点を顕在化させる画面を設けた。図5に、思知ツールの画面構成の切り替えメニューを示す。1)のモード選択メニューは、1画面/2画面、および、記述の編集/閲覧を切り替えることができる。たとえば、b)2画面編集では、右画面の記述を左画面にコピーしながら左画面を編集することを表す。次に2)先ほどのメニューごとに用意された画面選択メニューを示す。たとえば、1)で「b)2画面で編集」を選んだ時は、図中の2)の「2画面で編集するとき」に示した、「A記」「B記」「BA」「AB」から一つを選択する。A記は、記録から記述をコピーしながら思考Aを編集する画面に切り替わることになり、同様に、記録からコピーしながら思考Bを編集する画面、思考Aからコピーしながら思考Bを編集する画面、思考Bからコピーしながら思考Aを編集する画面となる。

(イ)について、執筆中のステートメントから、動的に論理構造を図示する画面を提供する。思考Aの編集では、図5の画面切り替えのa)1画面で編集する「思考A(悟知)」の画面(図3参照)に相当する。どのステートメントからも根拠としてつながらない宙に浮いたステートメントの確認や、判断や指針の不足など、論理構造の精査を促せられると考える。

(ウ)について、悩みを記入する「葛藤」画面において、思考A、Bそれぞれのステートメントから指針を選ばせることで、二つの指針の間の対立について吟味を促すことを狙う。図5のa)1画面で編集、および、c)1画面で閲覧の「葛藤」の画面に相当する。

(エ) について、思考 A と B の記述や、思考 A と B の論理構造を並べて表示することで、看護師に記述のアンバランスへの気づきや、本来、もっと多様な想像が可能であることへの気づきを期待している。図 5 の d) 2 画面で閲覧の「AB」(図 6 参照) および「悟悟」(図 7 参照) の画面に相当する。

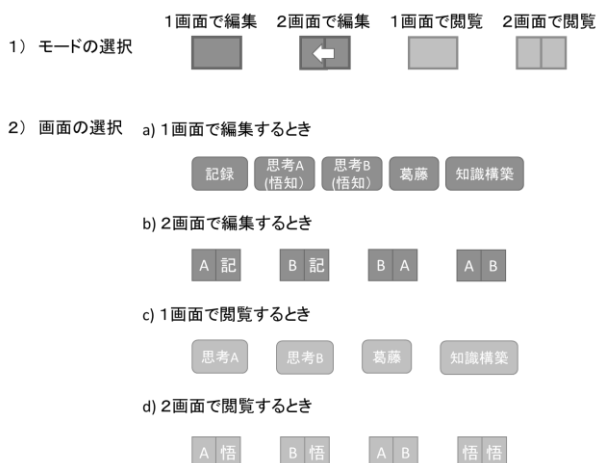


図 5: 思知ツールの画面切り替えメニュー

思考A				思考B				
N	タグ	内容	根拠	操作	N	タグ	内容	根拠
1	事実	母親は気丈に振舞っている			1	指針	細心の注意を払いつつ、母親の希望を尊重する	
2	事実	他の母親の抱っこを見ている			2	指針	母親の心理的負担を軽減させる	
3	推定	本心は抱っこを熱望しているかもしれない	1 2		3	判断	抱っこさせる	1 2
4	事実	医師に抱っこの許可を求めた						
5	指針	家族の精神面のケアしつつ児の状態の状態を優先						
6	判断	抱っこを我慢させる	3 4 5					
7	事実	抱っこを希望していたと知る						
8	結果	悔やまれる	6 7					

図 6: 思考 A と思考 B の思知の比較画面

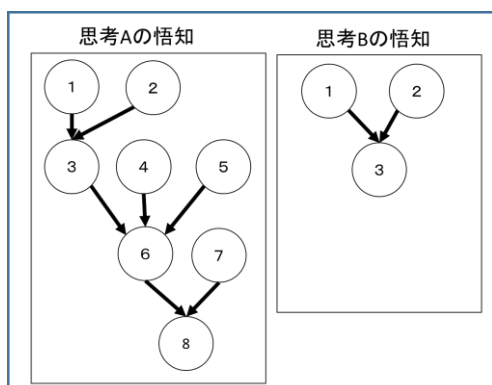


図 7: 思考 A と思考 B の悟知の比較画面

5 まとめ

本稿では、病院看護における思考の特性を踏まえ、表現規約を設け、規約からの逸脱による思考の問題点への気づきを促すライティングツールの画面構成について検討した。その他に、看護思考の詳細な推定を行うため、ライティングツールの操作を記録し、執筆プロセスを再現する再生機能を検討している。今後、この設計をベースに開発し、実際の病院組織の研修へ導入、および、検証を計画している。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18H01051 の助成を受けた。

参考文献

- [1] バーバラ ミント (著), 山崎 康司 (訳): 考える技術・書く技術—問題解決力を伸ばすピラミッド原則, ダイアモンド社,(1999)
- [2] 中田康夫, 田村由美, 藤原由佳, 森下晶代, 平野由美, 石川雄一, 津田紀子: 基礎看護学実習 I におけるリフレクティブジャーナル導入の効果: リフレクティブなスキルの活用の有無による検討, 神戸大学医学部保健学科紀要, 18 巻, pp131-136, (2002)